



プ チ エ

とは違って、男性の扇とい
うのは、なんともいえな
い涼やかな品性のような
のを感じますね。

—「ハルリヤンム」です
か。西洋の舞でも、小道具
として女性が扇を使うの
は見たことがあります。男
性が扇で舞うというの
はあまり印象にないです
ね。しかし、女性の「華
やぎ」

扇から伝わってくるの
かもしれないね。言われ
てみると、韓国や日本の
男性はさりげなく扇子を
使うような場面がありま
すが、欧米の男性が扇子
を使う姿は私が見たこと
がありません。

—「ハルリヤンム」です
か。西洋の舞でも、小道具
として女性が扇を使うの
は見たことがあります。男
性が扇で舞うというの
はあまり印象にないです
ね。しかし、女性の「華
やぎ」

と似ていますね。一見
ジャソルの違うパンソリ
の世界ですが、それが
寿玉さんの舞踊に示唆
を与えていることがあ
るのですか？

—それは、寿玉さんは
最初から扇の舞が好き
だったのですね。
寿玉—それが、最初の
印象は「嫌だなあ」。

—えっ？
寿玉—（笑）私がまだ
踊りを始める前のこと
です。下関の青年会の
パレードで華やかだか
らという事で踊らされ
た時の印象でした。そ
のときはもちろん、扇
の持つ表現の深さや、
内面から醸し出される
美しさがわかりませ
んでした。だから、そ
う思ったのです。今
は、白地に素敵な書
の描かれたプチェで、
飾らず粋に踊りたい
と思います。いつか、
そんなわがままなプ
チェを手に入れたら
いいなと思います。す
ごい小道具を使うに
は、相應の自分がない
と（てれ笑）。

—素敵ですね。確かに
「舞いすぎ」は暑苦し
い感じがします。日常
の中のさりげない美し
さが身近な道具であ
る。扇がすべての小
道具になるところは
落語の扇子



いのちの伝承

神宮寺住職 高橋 卓志

いのちの伝承06
今年も神宮寺を舞台に、戦争の放棄、亡き人々への追悼、生きる者の役割、そしていのちの本質を問う1週間が始まります。

『原爆の図』

1945年8月6日ヒロシマ。8月9日ナガサキ。人類史上初めて、原子爆弾が多くの人の頭上で炸裂しました。この二つの原爆で亡くなった人は20万人を越え、いままそれは多方面に影響を与えています。

神宮寺はこの原爆を真正面から見据え、後世にその「惨禍」を伝えようという困難な画業を生涯にわたって続けられた、丸木位里、俊ご夫妻と深いご縁で結ばれています。1988年松本市で開催された『原爆の図』展の際、神宮寺に立ち寄られたご夫妻は、完成したばかりの神宮寺本堂にお参りされました。そこには真新しい、真っ白な無数のふすまが林立していたのです。その日からご夫妻の画家としての仕事が始まりました。そして50日間をかけて本堂のふすま88枚に絵を入れてくださったのです。ご夫妻による共同制作としては最後の大作とされています。そのようなご縁の中、ご夫妻が希求してやまなかった平和へのおもいを表現するために、神宮寺は1997年より「いのちの伝承」というプログラムを展

開し始めました。戦争や紛争、災害など、地球的な危機に対する

して、その解決方法を探るために、そして風化がはなはだしい過去の戦火や災厄に対して、その真実の姿を伝承するために、この企画がスタートしたのでした。もちろん、その中心には『原爆の図』の展覧がありました。しかも丸木美術館に収蔵されている、本物14部(各縦1.8m×横7.2m)を毎年1部づつお借りし、14年の歳月をかけて展覧をする、という企画でした。

丸木ご夫妻は95年、ノーベル平和賞にノミネートされ、最終選考における3組の中に入っています。選考理由は、「原爆投下を行い戦勝した国であるアメリカの統治下という困難な戦後において、絵という手法によって多くの人々に原爆の悲惨さと苦しみを伝えたいという功績による」とあります。ピカソがナチスドイツのグラナダ攻撃に怒り、世界的に有名な「ゲルニカ」を描いたことと並び称されるものとして『原爆の図』はあります。

その世界の宝が毎年神宮寺で展覧されています。当初は1部づつお借りしてきましたが、昨年からは2部をお借りするようになりました。昨年までの展覧は以下のようになっています。

- 1998年・第14部「からす」
- 99年・第11部「母子像」
- 00年・第4部「虹」
- 01年・第5部「少女少女」

02年・第7部「竹やぶ」
03年・第1部「幽霊」
04年・第8部「救出」
05年・第3部「水」
第10部「署名」
そして今年も『原爆の図』2点、第2部「火」、第14部「からす」が展覧されます。

「からす」
じつは第14部の「からす」は、第1回目の展覧でお借りしたものです。神宮寺では2度目の展覧になるパネルは初めてのことです。

「からす」の解説にはこうあります。韓国・朝鮮人も日本人も同じ顔をしていません。被爆したむざむざな姿はどこで見分けることが出来ましょう。

『原爆がおちやけたあと、一番あとまで死骸が残ったのは朝鮮人だったよ。日本人はたくさん生き残ったが朝鮮人はちっとしか生き残らんちゃったけん。どがんもこがんもできん。からすは空から飛んでくるけん、うんときたばい。朝鮮人たちの死骸の頭の目ん玉ば、からすがきて食うとよ。からすがめん玉食らいよる』(石牟礼道子さんの文章より)

屍にまで差別を受けた韓国・朝鮮人。屍にまで差別した日本人。共に原爆を受けたアジア人美しいチヨゴリ、チマが。飛んで行く朝鮮、ふるさとの空からす完成、謹んでこれを捧げます。合掌。

「からす」はナガサキをモデルにしています。当時ナガサキには三菱重工業という軍需産業の拠点がありました。そこには朝鮮半島から強制的に連れてこられたたくさんの方々が働いて(働かされて)いた、といわれています。原爆投下は日本人も朝鮮人も差別せず、被害者としての大きな差別が与えられました。日本人は埋葬され、朝鮮人は捨て置かれる……という。そして累々としたその遺体はどこからともなく飛んできたからすが群がり、目の玉をつついたのだ……という。

『原爆の図』第14部「からす」の中央には、魂となつてふるさとの空に向かって跳ぶ、チヨゴリ、チマが描かれています。

チヨゴリ、チマに祈る 私たちは丸木夫妻が描いたこのすさまじい「差別」の光景をどうとらえたらいいのでしょうか。第1部「幽霊」や今回展覧される第2部「火」などのように、戦争のそして原爆の直接的被害は「からす」の中には見えません。

しかし戦争という究極の状態、しかもいのちのやり取りの中で人間の差別と言う本性が動く恐ろしさを、この絵は私たちに教えていると思うのです。そしてその本性により執ってしまった恐ろしく、おろかな行動を私たちが深く反省しなければならぬと思います。それとともに、死した後も捨て置かれ、群がる「からす」のなすがままになっていた人々への鎮魂を、改めて行わねばならないと強く思うのです。鎮魂に、そしておろかな行為を二度と繰り返さない誓いのために、毎年開催されている原爆忌(8月5日)は、韓国舞踊家の趙寿玉さんをお招きしました。この「からす」の前で、無念のうちに亡くなっていった人々、なすすべなく亡くなっていった人々、そして望郷の念が果たせなかつた人々の魂に向けて、故郷の音の響きと故郷の舞いをささげてもらいたい、と思うのです。

今年、神宮寺にこの「からす」が再び展覧される意味は、そこにあります。そして趙寿玉さんに渾身の舞いをお願いする理由はそこにあります。

『原爆の図』展
第2部「火」・第14部「からす」
期日・8月1日(日)～8日(日)
午前9時～午後5時
場所・神宮寺本堂
入場・無料

「原爆忌」メモリアルコンサート
期日・8月5日(木)午後6時～
場所・神宮寺アパロホール
出演・趙寿玉、李明姫、
朴根鐘、李東信、ほか



韓国で見たサルプリ舞

宮崎 節子

6月14日から17日まで鈴木、箱崎、柏木そして宮崎の4人は、家族旅行と間違えられながらソウルへ。梅雨真つ只中、乱気流にはまったのかKAL機は木の葉のように揺れて、志生が吐く寸前にどしゃぶりの金浦に到着。ソウル市内はW杯サッカーの予選で韓国が逆転勝利し凄じ熱気。このエネルギーは何処から湧いて来るのかと、韓国に来るたびに思う。いつも闘っているような生活、その活気を私も嫌いで

はない。時には利那的な影をも含めて。

今回の目的は宋和映先生の公演鑑賞と趙寿玉先生が特別ゲストで踊るから。「花草別鑑之曲」と題する素敵なパンフレットには、新羅千年花郎の脈の副題が付き、時代時代の伝統舞踊名が書かれている。宋和映先生の僧舞が見たかったのですが前日踊られたようで、残念でした。しかし、韓国の乾いた空気の中で、白いチュマチヨゴリ姿で舞う寿玉(古い友



人としての敬称略)のサルプリはひととき印象深いものでした。動作の中に溢れそうになる心をこぼれないようにと、危うい「時の瞬間」をそつとスゴンに託し、解き放ちまたそつとつかむ。国楽院の広い舞台空間が寿玉のサルプリでふくらみ、私たちも引き込まれて行く。13年前寿玉が韓国でサル

「渡来人まつり in 浅間温泉」



千葉 登美子

渡来人と聞いて人はどんなイメージを持つだろうか? 外国から渡つて来る人。浅間温泉はかつて渡来人が住んでいた。その名残は、浅間温泉桜ヶ丘古墳から天冠が出土されているという。天冠は5〜6世紀頃、寿玉の祖国の人の渡来品なのだろうか? その天冠の形を形取つた半天を、このまつりの仕掛人である神宮寺の住職、高橋さんを始めスタッフの皆さんが粹に着こなしておりました。それも又まつりを盛り上げるものでした。寿玉の踊り、明姫さんの歌、康さん達の鐘と太鼓、新井英一、李政美、朴保、趙博という在日の歌手だけのステージ、嫌が上

プリを一人で踊った時を思い出す。李梅芳先生の処で学び1993年個人公演を持った。あの時「足の震えが止まらないよ」と言つて、一生懸命身体に馴染ませるように踊る寿玉のサルプリが初々しくとても新鮮でした。5分の踊りでさえ身体に馴染ませるのが至難なこと、ましてや韓国。当時寿玉

は子供を人に預け、干した洗濯物の山を残して、転がるようにして稽古場に駆けつけ、いつ来るか知れぬ先生をひたすら待つ。目の前の寿玉と重なり「あんたサルプリを踊る年令になつたんだね、寿玉」と思わず舞台の彼女に語り掛けていました。来て良かった。そうでした。来ても皆も。

にも渡来人というロマンの想像力をかき立てられる。スタッフの方達を始め、ここに居合わせた総ての人々と笑顔を交し合うと、人は皆自由に行つたり来たり、国なんていう隔たりは無いんだよと思う。現実には厳しいけれど、こんな日が今ここにあるということ、少しづつ明るい方向へ人は変わつてゆくと信じたい。緑の樹木の輝く、光溢れる神宮寺境内の舞台上で踊る寿玉は、良い場を得てとても気持ち良く舞っているように見え、とても美しかったです。又、いつも室内で聴く明姫さんの声もあの場では低音がどこ迄も伸びてハツとしました。舞いも歌

も本来は野外のものだったので? と思つてしまいました。渡来人: 私はどこから来たのだろう? そんな事を考える良い機会の3日間でした。今回初めて寿玉の楽屋裏を見せてもらいましたが、本番に向けて精神の集中をしてゆかねばならない寿玉も大変だろうが、作業としての現実の大変さも分つた。3時間以上もひとりで衣裳のアイロンかけをする、鮮玉ちゃんも大変なものである。フォローする人も神経を使う。チュムパンの会の人達のいつもの苦労が分つた気がしました。チュムパンの会の人達に守られて寿玉は幸せね。

踊れないハニワ

柏木 美奈

伸びきらず曲がりきらぬ腕、ノッシと踏んばった両足、ズン胴、縮んだ首、細い目、低い鼻、どこをどう見ても『踊るハニワ』、いや、『踊れないハニワ』、それが私だ。韓国舞踊を習いはじめて三月。

ただただ先生と先輩方の舞姿を拝見したさに、週一回、夜の幡ヶ谷教室まで、湘南茅ヶ崎から通っている。

そもそも韓国舞踊には、学生時代に李良枝さんの小説を読んできて以来、ずっと淡い憧れがあった。それが、去年横浜で李梅芳先生と舞踊団の方々の公演を見たとき、焦がれるような思いに変わった。

大感激し、この素晴らしい芸術をもっと見たいもっと知りたい、どうすればいいのだろうかと考え、いっそ習ってしまおうと決めた。

そのとき私の手元に、「韓国舞踊教室おさらい会」の文字と連絡先が印刷された、趙寿玉先生の公演のDMがあった。

たことは、とても幸運な偶然だった（写真が綺麗だったからとっておいたのです。本当によかった！）。

韓国人を父にもち、幼小期を韓国人としてソウルで過ごした私だが、父の失踪を機に母と同じ日本人となり、長く日本で暮らすうちに、昔の記憶はほとんど消えてしまった。

けれど今、韓国のリズムと旋律に体をゆだねていると、長い間他人事のようにしかとらえられなかった人生の最初の数年間が、すこしだけ愛しく思えてくるから不思議だ。韓国舞踊という芸術が、万物を包み込む力を持つ、ひとつのコスモスだからだろうか。



「首のばして」「お腹とお尻をしめて」

先生の言葉に「はい」と答えてはみても、体は踊れないハニワのまま。

正直、今はまだ、自分で踊るより皆さんの踊りを見ての方が、私には幸せだ。でも、自らの体を通して韓国舞踊を学ぶことで、ただ見ているだけでは解らない何かに触れることができらばと思う。

ひといきに飛ぶことはできない。ひと足ずつ、長く、焦らずに歩み続けたい。

活動記録 & 予定

◎ 4月22日 季座（ときざ）さろん ― 日韓の音楽 ― にて 即興舞を踊る。

◎ 4月25日 趙寿玉写真集出版記念の集い

雨の降る中、三軒茶屋の三茶しゃれなあどに大勢のお客様が駆けつけてくださいました。散調舞、小鼓舞、鳥打令を披露。また軽食をしながらの歓談もあり楽しい時間を過ごしました。

◎ 6月3日 ― 渡来人まつり in 浅間温泉 ―

松本市の神宮寺にて渡来人音楽祭に出演。

◎ 韓国公演 ― 花草別監ノルム ― 宋和映風

6月13日 国立劇場大劇場「シナウイ立舞、ペンノレ杖鼓舞、三鼓舞、鳥打令」

14日 国立音楽院 芸楽堂 「僧舞、唱夫打令、鳥打令」
15日 国立音楽院 芸楽堂 「春鶯伝、シナウイ立舞、サルプリ舞、鳥打令、杖鼓舞」

◎ 静岡韓国商工会議所 総会にてサルプリ舞を踊る。

◎ 7月22日 ― ソリと舞 ― 鑑賞の夕べ

上野区民館、PM4:00開演。
在日同胞親睦会の主催で行われる。

◎ 8月5日 神宮寺アバロホールにて「命の伝承」原爆忌公演。

6〜8日 神宮寺アバロホールにて檀家さんを対象としたお盆の法要での公演。

◎ 9月15日 日韓の和 新たな出会いと題して、「羽衣伝説」

― 日韓伝統芸能による ― 公演に出演。
セシオン杉並ホール、PM6:30開演。
日本、韓国ともに言い伝えられている羽衣伝説を題材に、両国の伝統音楽と韓国舞踊がおりなす舞台をおとどけます。